

六方田圃のアカトンボ

上田 尚志

はじめに

近年、ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* の増加が各地で報告されており、水田の水管理との関係が指摘されている（赤トンボネットワーク事務局、1996）。当地方でもその傾向が見られるので報告する。

調査した六方田圃は、兵庫県豊岡市の円山川の東に位置し、昭和30年代には野生のコウノトリが生息していた所である。洪水の度に冠水を繰り返す湿田地帯で、用水路には多様な動植物が生息していた。近年、基盤整備が完成したのにともない、用水路はコンクリートの排水路となり、水はポンプで田圃に入るようになった。

1996、1997年のデータは筆者が一人で観察したものであるが、1998年のデータは、筆者が参加するコウノトリ市民研究所の子供たちを含めた85人の人数で実施した調査からのものであり、同定も筆者だけで行ったものではない。いずれも採集した後、まとめて種名を確認して放すという手法をとった。

調査結果

六方田圃では3種類のアカトンボが見られた。1996年と1997年は、アキアカネ *S. frequens* が5割以上を占め、ノシメトンボが3割から4割、そしてナツアカネ *S. darwinianum* が若干混じっているという状況であった。

1998年の調査では、午前中、霧が深くトンボがなかなか飛ばなかったが、午前10時頃から霧が晴れ、調査には絶好の天候となった。調査の結果、ノシメトンボの割合が14%と前年までに比べて少なかった。子供たちが多く、アキアカネの方が捕獲しやすかった可能性も考えられるが、捕獲個体数も多かったので、その日のトンボの状況をある程度反映していると思われる。アキアカネが多かったことについては、1998年はアキアカネが山から下りてくるのがかなり遅く、ちょうど10月下旬にピークを迎えたためと考えられる。観察会のために下見をした10月上旬の時点では、アキアカネの個体数は非常に少なく感じられた。

表1 六方田圃のアカトンボ調査結果

(兵庫県豊岡市駄坂～木内)

年	1996	1996	1997	1998
月日	10/27	11/3	10/10	10/25
アキアカネ	♂ 5	7	13	159
	♀ 17	22	5	247
	計 22(52%)	29(63%)	18(56%)	406(82%)
ナツアカネ	♂ 1	2	0	8
	♀ 3	1	0	12
	計 4(10%)	3(7%)	0(0%)	20(4%)
ノシメトンボ	♂ 12	9	11	48
	♀ 4	5	3	23
	計 16(38%)	14(30%)	14(44%)	71(14%)
総個体数	42	46	32	497

但馬におけるノシメトンボの状況

筆者の手元にある、これまでに報告されているノシメトンボの記録と、筆者のフィールドノートのノシメトンボの記録を抜き出すと、以下のようになる。

採集記録（採集された場所と年だけ抜き出した。カッコ内は採集者名）

1986年	日高町上郷
1987年	日高町上郷
1989年	日高町上郷
1989年	和田山町柳原（吉井光和）
1990年	豊岡市中郷（山崎喜彦）
1990年	日高町上郷（山崎喜彦）
1990年	八鹿町伊佐（山崎喜彦）
1991年	杉ヶ沢高原（関西トンボ談話会）
1992年	豊岡市小島・円山川公苑（関西トンボ談話会）
1993年	竹野町林
1993年	日高町神鍋高原
1994年	香住町佐津
1994年	豊岡市下加陽
1994年	豊岡市新田・六方田圃

1994年 豊岡市板江（宮垣友洋）
 1994年 豊岡市森尾（宮垣友洋）
 1994年 豊岡市伊賀谷（宮垣友洋）
 1995年 豊岡市小島・円山川公苑
 1995年 村岡町大笠・ハチ北高原
 1996年 豊岡市新田・六方田圃
 1996年 豊岡市江本
 1997年 豊岡市祥雲寺・コウノトリ郷公園
 1997年 豊岡市小島・円山川公苑
 1997年 日高町十戸
 1997年 日高町神鍋高原
 1997年 豊岡市新田・六方田圃
 1998年 豊岡市新田・六方田圃

但馬で初めてノシメトンボが記録されたのは、1986年の日高町上郷におけるものだと思われる。ここ西の谷地は、かなり広く浅い用水池で水草も多い。岸辺は水位がさがると干上がることもあり、その周辺には放棄田からなる湿地、草地が広がる。

上郷以外の場所でノシメトンボが私のフィールドノートに登場するのは1993年以降であるが、この間、但馬各地で記録が増えている。これらの記録から、ノシメトンボは1980年代の中頃に増え始め、1990年代前半に急速に分布を拡大したと考えられる。

近畿地方でのノシメトンボの増加状況は上田（1997）によると、1985年以降急激に増加していることが指摘されており、当地方においてもこれとほぼ一致する。

ただ、但馬にもともと生息しなかったかどうかは、はつきりとしない。この件に関して、会員諸氏のフィールドノートの中から但馬の情報が多数寄せられ、さらに正確な状況がつかめることを期待したい。

おわりに

10年以上前、但馬むしの会でアカトンボ調査と、アカトンボ観察会を実施したことがあった。今はもうないが、円山川公苑の小さな池にキトンボがいたのをよく覚えている。とても美しいトンボだ。六方田圃で行った普及行事アカトンボ観察会は、一般参加者が一家族だったが、無数の連結飛行をするアキアカネがいた。もちろんノシメトンボの記録はなかった。あちこちでソバの花が咲いており、休耕田が広がった時期でもある。その後、機械による省力化を進めるため、基盤整備が進んだ。今回の調査は、野生生物が人の暮らしとかかわって生活していることを強く印象づけるものであった。

参考文献

- 赤トンボネットワーク事務局（1996）アキアカネが減り、ノシメトンボが増えている？ Symnet 5:10-11.
 上田哲行（1997）ノシメトンボ増加傾向についての考察、Symnet 6:6-7.
 山崎喜彦（1991）但馬におけるトンボ目成虫の標本目録（1984～1990），和田山中学校科学部
 宮垣友洋（1995）豊岡市で採集した蝶・トンボ、IRATSUME 19:26-34.
 二宋誠治（1991）兵庫県北部地方のトンボ相調査会第3回晚秋、gracile 45:49-51.
 青木典司（1991）兵庫県北部地方のトンボ相調査会第5回夏、gracile 46:33-37.

但馬むしの会の年会費は3000円です。

会費未納の会員は速やかに

お支払いください。

また、本誌に寄稿された方は、

原稿掲載料として

1000円をお支払いください。

24号に向けて、カンパも募ります。

郵便振替は、

01120-3-16245、但馬むしの会、です。